

学位請求論文審査報告

2018 年 11 月 14 日

筆者 胡 芸群

論文題目 中国人留学生の研究観の形成とその変容過程
—大学院修士課程入学前から修了後まで—

論文審査委員 西谷 まり
石黒 圭
太田 陽子

1. 本論文の構成と内容

本研究の目的は、中国人留学生がどのような研究観に基づいて日本の大学院への進学を希望・準備するのか、また、大学院入学後、修士課程で取り組む研究諸活動の中で、その研究観が何によって、どのように変容していくのかを明らかにすることにある。

本論文では、まず大学院を目指す日本語学習者が大学院の教員宛に送った「研究生になりたい」という内容のメールを調査資料とし、大学院の教員、日本語教師、大学院留学生、日本語学習者の 4 グループに評価してもらい、その結果を量的に検討している。次に、PAC (Personal Attitude Construct) 分析を用いて、大学院進学を目指す中国人日本語学習者、および、大学院を修了した中国人留学生のそれぞれについて、どのような研究観を形成しているかを調査し、その形成要因を明らかにしている。最後に、大学院を修了し、博士課程へ進学した中国人留学生に着目し、研究活動を通して得られた気づきと学び、さらに、自己の成長について分析・考察を行った。

本論文は 9 章から構成される。その構成は以下の通りである。

第 1 章 序論

1.1 問題意識

1.2 研究背景

1.2.1 中国における日本語教育の現況と問題点

1.2.2 日本における日本語教育の現況と問題点

1.3 用語の定義

1.3.1 「中国人日本語学習者」と「中国人留学生」の定義

1.3.2 「研究観」の定義

1.4 研究目的

1.5 本論文の構成と各章の概要

第 2 章 先行研究と本研究の位置づけ

2.1 大学・大学院における留学生生活の実態

2.2 大学・大学院で求められる言語能力

2.2.1 アカデミック・ジャパニーズとは

2.2.2 どのような日本語力が求められているのか

2.2.3 大学・大学院におけるアカデミック日本語教育の実践研究

2.2.4	研究活動に着目したアカデミック日本語教育の実践研究
2.3	大学院における学びと研究
2.3.1	学習に対する捉え方の変容
2.3.2	実践コミュニティへの参加
2.3.3	大学・大学院における学生の研究意識
2.4	第2章のまとめと本研究の位置づけ
第3章	「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識
3.1	調査概要
3.1.1	メールの場面設定
3.1.2	メールのサンプル抽出
3.1.3	調査協力者
3.2	調査方法
3.3	調査結果と分析
3.3.1	評価観点の基本構造
3.3.2	読み手同士の評価基準の比較
3.4	第3章のまとめ
第4章	大学院進学を目指す中国人日本語学習者の研究意識の特徴
4.1	調査概要
4.1.1	調査協力者
4.1.2	調査方法
4.2	調査結果と分析
4.3	考察
4.4	第4章のまとめ
第5章	大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴
5.1	調査概要
5.2	調査結果と分析
5.3	考察
5.4	第5章のまとめ
第6章	研究活動を通して得られた学びと気づき
6.1	博士課程に進学した中国人留学生の研究観
6.1.1	留学生Dの場合
6.1.2	留学生Eの場合
6.2	考察
6.3	第6章のまとめ
第7章	大学院に在籍する中国人留学生の研究観の形成および変容とその要因
7.1	調査概要
7.2	研究観の変容
7.3	総合的解釈
7.4	考察
7.4.1	「継続して出現する研究意識」の特徴
7.4.2	「一度消えて再度出現する研究意識」の特徴
7.4.3	「部分的に現れ最後は出現しなくなる研究意識」の特徴

7.4.4 研究意識に影響を与える要因

7.5 第7章のまとめ

第8章 修士論文を書き上げるまでの研究活動の参加過程および意識の変容

8.1 TEMの手法と主要な概念

8.2 分析の手順

8.3 分析結果

8.4 考察

8.4.1 促進要因（SG）および阻害要因（SD）による影響

8.4.2 論文を書き上げるまでのプロセスから見る意識の変容

8.5 第8章のまとめ

第9章 結論と今後の課題

9.1 まとめ

9.1.1 「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識

9.1.2 大学院進学を目指す中国人日本語学習者の研究意識の特徴

9.1.3 大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴

9.1.4 研究活動を通して得られた学びと気づき

9.1.5 大学院における中国人留学生の研究観の形成および変容とその要因

9.1.6 修士論文を書き上げるまでの過程のTEM図による可視化

9.2 大学院予備教育での取り組み

9.3 大学院における研究活動への取り組み

9.4 今後の課題

本論文のもとになった既発表論文

参考文献

資料編

2. 本論文の概要

本論文は、大学院入学前、修士課程在学中、修士課程修了後に至る中国人留学生を対象に、量的及び質的調査を行い、中国人留学生がどのような研究観に基づいて日本の大学院への進学を希望・準備するのか、また、大学院入学後、修士課程で取り組む研究諸活動の中で、その研究観が何によって、どのように変容していくのかを明らかにしたものである。

以下、本論文の章立てに従い、各章の概要を紹介する。

第1章「序論」では、筆者がこの研究課題に取り組むようになったきっかけと、この研究課題を取り上げる意義が述べられている。本論文の執筆動機は次の通りである。筆者が非常勤講師として担当した日本語学校の大学院進学クラスで、学習者が大学院の教員宛に書いたメールの内容を添削していくうちに、中国人日本語学習者が書いたメールは、大学時代の成績やこれまで履修してきた授業科目などの内容ばかりであり、なぜ大学院に行きたいか、どんな課題を研究したいか、どんな文献を読んできたかという研究に関わることにについては、ほとんど書かれていないことに疑問を感じるようになった。研究したい課題については「よくわからない」、「先生の指導に従う」といった受け身の態度が見られた。それに対して、大学院に在学中の院生や修士課程修了者からは、入学当初、ぼんやりとしていた大学院のイメージや研究への認識が、大学院生活の深まりと共にはっきりとしたものへと変化してい

くという声が聴かれた。そこで、こうした認識の変容が何によって、どのように起きるのかについて、研究活動との関わりの中で深く探ってみたいと考えるようになった。そして、中国人留学生が大学院進学後、どのように研究活動に参加し、その過程において研究の姿勢がどのように変容していくかを把握することが、今後大学院進学を目指す中国人日本語学習者への支援において重要な課題であると感じるようになったということが述べられている。

第2章「先行研究と本研究の位置づけ」では、大学・大学院における留学生の生活面・言語面・学習（研究）面から先行研究を概観している。まず、留学生の生活面については、留学生支援の観点から留学生活の実態を分析した論文を中心に考察している。次に、言語面については、アカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ とする）の定義を整理した後、AJ の使用実態や留学生のニーズ、AJ 教育に関する実践研究について概観し、そして大学・大学院を実践コミュニティとして捉えた研究面については、理工系と人文社会科学系分野に分け、学術的コミュニティの参加について概観している。

第3章「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識」では、大学院の教員、日本語教師、留学生、日本語学習者、計75名の調査協力者を対象に、大学院の教員宛に書いた「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識について、質問紙調査を実施している。分析の結果、「日本語の正確さ」、「読み手への配慮」、「書き手の背景」については、評価者グループごとで重視度が異なっていた。「日本語の正確さ」については、日本語学習者が最も重視しているのに対し、大学院の教員はあまり重視していない。「メールの構成」については、大学院の教員、日本語教師があまり重視していないのに対し、留学生、日本語学習者はともに高く重視している。「書き手の背景」については、日本語教師と留学生、日本語学習者の間では有意差が見られ、日本語教師よりも学生の方が有意に高い得点を示していた。「研究理解・研究能力」については、いずれの評価者グループも重視度が高いことが明らかになった。その背景には、大学院における学びや研究に対する意識が影響していることも示唆された。

第4章「大学院進学を目指す中国人日本語学習者の研究意識の特徴」では、大学院進学をめざす中国人日本語学習者の研究意識に焦点を当て、PAC（Personal Attitude Construct）分析によるインタビュー調査を実施し、その特徴を明らかにしている。その結果、日本語学習者に共通して見られたのは、大学院において高い日本語力、特に会話を重視していること、また、日本社会や日本文化をより深く理解し、日本語力の向上だけでなく、視野の広がりを期待していることが確認された。研究に関しては、研究活動の流れを認識できていることや、研究課題の選定に興味・関心だけでなく、自分の学習経験や母語との違いから設定しようとしていることが明らかになった。また、他者との交流も重要視しているが、その多くは、日本語力の向上、語彙の習得など知識の獲得を期待しているためであり、自分の研究にどのように役立つのか、研究との関連性を見出せていないことが明らかになった。

第5章「大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴」では、大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴に焦点を当て、日本語学習者との比較を行っている。PAC 分析の結果、留学生に共通して見られたものは、努力の持続と能動的に取り組む姿勢であった。また、大学院における研究は一人で行うものではなく、ゼミなどで自分の研究を発信したり、他者との対話を通して自己の力不足を認識したり、多角的な視点を得たりしながら行うものであることも重視されていた。

こうした修了生の意識を進学前の日本語学習者と比較すると、日本語学習者との共通点としては、他者との交流が重視され、研究に対する努力や能動的に取り組む姿勢が必要であるという意識が挙げられていた。一方、相違点としては、日本語学習者は大学院では何かを学び、スキルを高めようとする学習意識が多く見られたのに対し、大学院を修了した留学生は、先行研究の重要性や研究に対するメタ視点の獲得などが意識されていた。

第6章「研究活動を通して得られた学びと気づき」では、博士課程へ進学した中国人留学生に焦点をあて、PAC分析を用い、研究活動を通して得られた気づきや学び、また、自己の成長について分析・考察を行っている。その結果、研究をする上で、周囲からいろいろな意見や批判的なコメントを受けることにより、傷ついたり、苦痛を感じたりしていたが、自分の弱点を意識したり、新たな気づきが得られたり、研究に対する認識をより具体化・精緻化できたことを客観的に浮き彫りにした。

第7章「大学院に在籍する中国人留学生の研究観の形成および変容とその要因」では、大学院で学ぶ中国人留学生を対象に、修士課程2年間における研究観の変容、およびその要因について分析している。6回のPAC分析を行った結果、大学院に入学した当初では、研究の手法や流れなど形式面に焦点が当てられ、研究に対して漠然としたイメージを抱いていたが、主体的に研究に取り組むなかで、研究を分析的・メタ的な視点で捉えるようになっていた。また、置かれている環境やゼミ、講義で受けた刺激によって、調査期間中に長期的に保持された研究観、一度消えた後再度現れる研究観、そして、一時的にのみ現れ最後には出現しなくなる研究観があることが明らかになった。

第8章「修士論文を書き上げるまでの研究活動の参加過程および意識の変容」では、前章と同じ調査協力者を対象に、修士論文を書き上げるまでの研究活動の参加過程をTEM（複線経路・等至性モデル）図によって可視化している。その結果、論文を書き上げるまでのプロセスは、「第Ⅰ期：テーマを探し始めてから研究方法が決まるまで」、「第Ⅱ期：質問紙の作成からデータ収集まで」、「第Ⅲ期：データ分析を始めてから修士論文を書き上げるまで」の3期に区分することができた。また、経路選択において、「研究環境要因」「他者との対話による要因」「周囲の支援による要因」の3つの要因が、促進要因かつ阻害要因として働いていることが明らかになった。

第9章「結論と今後の課題」では、大学院予備教育および大学院における研究活動への取り組みについて2つの提案を行っている。まず、大学院予備教育に、研究活動の疑似体験活動を取り入れる必要があるということである。2つ目の提案として、大学院で修士論文執筆に向けた研究活動に取り組む、研究に対する認識を深めるためには、(1) 研究環境のデザイン、(2) ロールモデルの必要性、(3) 他者・自己・研究との対話の3つの要素が重要であることを指摘している。今後の課題として、(1) 専門分野別に、日本語学習者と大学院留学生の研究意識の特徴を洗い出すこと、(2) 日本人学生やほかの国の留学生にも着目し、中国人留学生の研究観との共通点・相違点を検証すること、(3) ゼミにおける研究活動において、留学生と他者の相互作用に光を当て、研究観の形成との関連について、事例を収集することの3点を挙げ、上述の課題を踏まえ、大学院における研究観の形成およびその変容に関する事例を増やし、他者との相互作用にも注目しながら質的な分析を進め、研究の精度を高めていきたい、と述べている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、大学院の中国人留学生の研究観の形成と変容を分析している数少ない研究である。

本論文の成果は、次の3点にまとめられる。

第一に、入学前から修了後まで、対象者ごとの地道な調査をととして調査協力者の研究意識の変容と成長が時系列的に仔細に描けている点である。大学院入学前の日本語学校学生、修士課程に在籍する大学院生、博士課程に入学した大学院修士課程卒業生の3つのカテゴリーを対象に、丁寧に分析を行っている。その結果、調査協力者がそれぞれのステージでどのような研究観を抱き、それがどのように変容していったのかが明瞭になり、日本に留学する／している学生、そうした学生を指導する教員のいずれにも資する内容になっている。

第二に、中国人留学生の大学院進学および大学院における研究観の形成と変容を、学生の生の声を通して可視化している点である。たとえば、ゼミという場が、入学当初の意見をもたえられる場から、学年が進むにつれて研究をシェアし相互に学ぶ場へと認識が変わっていくこと、大学院留学生の困難点は克服されるまでは意識に上るが、それが克服されて普通になると意識に上らなくなること、博士課程への進学を目指すに至った学生は、修士は練習の段階として捉えていることなど、興味深い指摘が随所に見られ、院生指導の現場への応用が期待できる。

第三に、データ分析方法に創意工夫が見られる点である。大学院研究生志望のメールは先行研究やパイロット調査をベースに多様な評価項目を設定し、評価結果を因子分析で適切に整理している。また、大学院進学前から修了後までの中国人留学生の研究観はPAC分析で一貫して調査されており、研究観の比較が明確で、その変容を統一的に描くことに成功している。さらに、そうしたPAC分析のデータについて、フォローアップインタビューやTEM図で補強する形を取っており、複眼的な分析が可能になっている。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一に、分析手法の中心に据えたPAC分析の限界という点である。本論文の成果で述べたように、PAC分析によって研究観を一貫して扱えている点は評価できるが、PAC分析の場合、研究をめぐる直接的な連想のみが調査対象になってしまうため、研究観を背後で支える要因への目配りが不足してしまううらみがある。具体的には、先行研究で指摘されているように、自身の心身の健康、経済的な状況、同国人を中心とした友人関係、両親の期待などといったものが中国人留学生の研究観に影響を与えていると考えられるが、PAC分析では、そうした促進的または阻害的要因をあぶりだすことが難しい。質問項目を定めた半構造化インタビューを組み合わせることで、そうした点を補う方法も考えられたのではないだろうか。

第二に、調査対象者の人数が少なく、一般化に不安が残る点である。丁寧に質的分析を施す研究であるため、対象人数が少なくなるのはやむをえない面が、一般化を考える場合、調査対象の人数や専攻分野を広げる必要があるだろう。また、厳密な意味での縦断調査の対象は1名に留まり、大学院入学前、修士課程入学後の調査対象者が同一人物ではなく、異なる対象者であるために、厳密には縦断的に調査者の変化を明らかにしたものではなく、同一の対象者であった場合は、異なる経過を辿っていた可能性がある。

第三に、分析対象が修士課程修了までとなっている点である。研究観についてより深く掘り下げるためには、博士課程進学後の分析が必要ではないか。それにより、修士課程の研究観とは異なる変容が浮き彫りになった可能性もあろう。さらに、博士課程修了後、指導的な

立場についたときの検討もあると、研究観のマクロな変容をより総合的に考察できたであろう。

しかし、以上のような欠点はあるものの、筆者はそれを十分に理解しており、今後の作業において不足を補おうという意識を持っている。著者の今後の研究のなかで、さらに改善が期待できるものであると思われる。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 西谷 まり
石黒 圭
太田 陽子

2018 年 10 月 18 日、学位請求論文提出者、胡芸群氏の論文「中国人留学生の研究観の形成とその変容過程—大学院修士課程入学前から修了後まで—」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、胡芸群氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、胡芸群氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。